

大幡の昔話

大幡公民館長 門倉 新

地元の極めて古い家柄の中に、春・秋二回先祖祭りをしている家があるそう
な。

昔、昔、このご先祖が鶏を飼い、味のよい卵を産ませていた方がいたそう
な。ある朝、鶏が騒がしく鳴くので何事かと小屋をのぞいたそうじゃ。小屋の
中には今にも卵を飲み込もうとしている蛇の青大将がいたそうじゃ。主は「つ
いに見つけたぞ、卵を盗んだのはお前だったのか」と、持っていた鎌で蛇の首
を搔っ切ったのじゃと・・・

〔やれやれ〕と主は思った。しかし、主はその夜から「わたしの首を返せ返
せ」という蛇の夢が出るようになったとき。

その後は、鶏に代えて牛馬を飼ったとき。毎日草刈りに出かけ、籠一杯に草
をあつめて帰る途中、背中がぬくったり、重くなったりしたそうな。「おかし
なもんじゃ」と思いながら歩いていたそうじゃが、気になるので振り返ってみ
ると、大蛇が大きな口をあけて今にも主を飲み込まんとしていたそうじゃ。そ
れからというのは何処へ行くにも大蛇が「わしの首を返せ」と追いかけてくる
ようになったのじゃと。

主はその恐ろしさから悔いを改め、大蛇に「もうしないから許しておくれ」
と謝ったそうな。しかし、大蛇は日増しに大きく、速くなり、何処へ逃げても
追いかけられ、中条まで逃げたが「もうだめだ」と観念し、大蛇に「わしが悪
かった。子どもは悪くないのじゃから、祟るのはやめてくれ。その証に腹を切
って死ぬから許しておくれ」と。

子孫を護らんとの一念から壮絶な最期を遂げた。お陰で村は豊かになったの
じゃと。子孫はその徳をたたえ、神社の境内に社を建てたり、青大将の代わり
に白蛇を祀られたそうな。

(熊谷市公協だより 第44号 平成18年より)